コースを設定したりして、密集・密接を回避して長距離走に取り組むなどを挙げ、各競技でマスク着用の「必要がない」「必要最小限とする」場合を明確化した。

一方、かねてから幼児教育現場では子どもたちの発達の面で、表情が読めないなどの問題点が指摘されていた。

甲州市地域子育て支援センターあっぷっぷで実施している「絵本とわらべうた」の様子

子どもへの影響 長期的検証へ

「甲州市地域子育て支援センターあっぷっぷ」では、毎月第1と第3月曜に0歳児とその保護者を対象にした「絵本とわらべうた」を実施している。担当する同センター職員の塚田純子さん(55)は、「読み聞かせの場面で、どれほど表情に比重を置いて表現していたか思い知った。マスク姿でうまく伝えられないもどかしさがあった」と明かす。また、木下美沙希さん(32)は『もぐもぐ』や『あーん』『にこにこ』など、子どもたちにとって言葉だけでは分かりにくい動きをどう伝えればいいのか悩んだ」とも。

ただ、発達心理学などが専門の山梨英和大の佐柳信男教授(51)は「子どもたちにとって相手の感情を読み取る際に、マスクの有無は限定的な影響と考える。あまり心配しなくてもいいのでは」と話す。

佐柳教授によると、コミ

国が示したマスク着用の考え方

	身体的距離(目安は2㍍以上)が確保できる		身体的距離が確保できない	
	屋内	屋外	屋内	屋外
会話をする	推奨	必要なし (例)ランニングなど離れて行う運動 (例)鬼ごっこなど密にならない外遊び	推奨	推奨
会話をほとんどしない	必要なし (例)図書館での読書		推奨 (例)通勤電車の中	必要なし (例)徒歩での通勤など、屋外で人とすれ違うような場合

※熱中症対策として、屋外で着用の必要がない場面では、マスクを外すことを推奨する